

## 巻 頭 言

今年度も京都市立病院紀要（第45巻）ができあがりしましたので、職員の皆さんにお届けします。紀要には、職種の異なる多くの職員が、それぞれ業務を遂行する中で遭遇した問題、課題そしてそれらの解決策など、さまざまな成果、実績がまとめられています。お時間のあるときに、是非ご一読ください。

この第45巻には、チーム医療に関する総説の第一報と第二報、研究4編、症例1編が含まれているだけでなく、特集として、第38回京都市立病院地域医療フォーラムの内容、そして第22回院内合同研究発表会記録が掲載され充実した内容になっています。専門性が異なる発表ですと、内容の把握に時間を要する場合がありますが、病院で働く多様な職員が業務上抱える課題や困難を克服する過程を知ることができます。そこには、当院の安全で質の高い医療を多職種で連携・協働し継続していくための多くのヒントが必ず隠されています。ここにある一つひとつの成果を十分読み込み理解を深め、未来の多職種連携・協働に生かしてもらえればうれしく思います。

令和7年（2025年）12月1日に京都市立病院は創立60周年を迎えました。大々的なイベントは計画しませんでした。患者さんやご家族だけでなく、職員も楽しめて心が温まる、また学びもあるいくつかのイベントを実施していただきました。企画から実行まで、各イベントに関わっていただいた職員の皆さんには心より感謝申し上げます。

さて、現在当院の経営改善に向けて、京都市主導による「当院の今後の在り方検討」が行われています。どの医療機関も経営状況が厳しい中、京都市の検討だけに頼るのではなく、わたくしたちの自助努力として、令和6年度の病床稼働状況を参考に令和8年4月より休床を増やし全体の稼働病床数を減らすことを決定しました。一方、職員の皆さんによる様々な「収支改善の取組み」のおかげで、令和7年度下半期から病床稼働が上昇しています。さらなる病床稼働の向上による経営の改善は根本的に重要ですが、それと共に、わたくしたちが誇りにしている「安全で質の高い医療」を維持継続することはさらに重要です。わたくしたちが目指す医療の成果がこの紀要に載っていますので、是非その成果を心のより所として、「市立病院プライド」をもって前に進んでいただきたいと思います。よろしく願いいたします。

最後になりましたが、本巻の執筆、校正、編集に携わっていただいた皆さんに深謝いたします。

2026年1月

京都市立病院機構京都市立病院

院長 清水 恒 広